

## 宮川一翠子覚え書：和漢の位相

勝又，基  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9414>

---

出版情報：語文研究. 81, pp.1-10, 1996-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 宮川一翠子覚え書

— 和漢の位相 —

勝 又 基

はじめに

宮川一翠子は、元禄期を中心に数編の啓蒙的な著述をものした人物である。その著述は、『詞林意行集』目録の記述が従来から加藤磐斎らの伝記資料として取上げられ、また近年では、『眠齋集和語対類』が漢和俳諧史の面から言及を受け、『訓蒙故事要言』が近世小説の典拠として注目されるなど、近世文学研究の場において、近年注目を浴びつつある一人と言ってよからう。しかし彼の伝記については未だ不明瞭な点が多いように思う。そこで本稿では、一翠子の伝記上不明であった点を幾分か明らかにしつつ、そこから浮かび上がる問題点について考えてみたい。

## 一 翠子の著述

彼の著作で知られているものを年代順に挙げれば以下の通りである。

- 天和二年『眠齋集和語対類』（漢和俳諧集・辞書）
- 貞享二年『本朝帝王正統録』（『本朝皇胤紹運録』の補刻）
- 同四年『叢林両部鈔』（漢詩抄物の翻刻）
- 同五年『瀟湘八景詩歌鈔』（漢詩注釈書）
- 元禄三年『詞林意行集』（紀行文の翻刻）
- 同六年『拾遺意行集』（紀行文の翻刻）
- 同七年『訓蒙故事要言』（故事要言集）
- 同九年『和語田機活法』（漢詩作法書）

以上の八部が実見でき、彼の作と確認できるもの。他に『慶長以来諸家著述目録 和学者之部』は、『千々の友』五巻を彼の著作として挙げる。同題の書は『国書総目録』には、「千々の友ちのちの」五冊⑧和歌⑨寛延四年⑩広島大⑪とあるのみ。寛延と時代は多少下るものの、冊数も合致し、気になる所であるが、該書は戦災により焼失しており、他に所在が確認されないため、残念ながら今のところ確かめる術がない。

今その著書によって一翠子の文業を眺めると、漢詩作法書『和語

「円機活法」をはじめ、漢詩抄物の翻刻『叢林函部鈔』、故事要言集『訓蒙故事要言』などは漢詩文の知識を背景としてしているものと言つて良いが、『詞林意行集』『拾遺意行集』が、紀行文という視点から先人のものを漢文・和文の別なく集めており、また、『瀟湘八景詩歌鈔』が、漢詩の注釈書でありながら、瀟湘八景詩に材を採った中世和歌を博搜しているなど、漢詩文を知識の軸としつつ、和文芸にも造詣の深かった事が知られる。「詩賦數百篇、倭歌幾許首有り。狂句滑稽是れ其の餘力なり。」(『眠窟集和語対類』自序)という自身の発言からも窺われる、こうした和漢に渉るあり方は、この期の京都知識人にはよくある事、と言つてしまえばそれまでであるが、その和漢文学受容の位相は各人一様ではないはずであり、それらを具に押えようとする試みが無意味とは思われない。雑然さを一つの特徴とする寛文〜元禄期の初期文人の一人として、一翠子の和漢の教養はいかにして形成されていったのであろうか。

### 松堅との関係

彼宮川正春先生也者  
仁有り義有り 喜も無く憂も無し  
遙かに聞く宮川の末孫 長く智水を傳ふ  
初て見る正由の難第 久く慎家に住す  
湛々たる学海天際に漲る 潔々たる清流世塵を洗ふ  
此の故に  
格物致知 功名を夷國に發す  
正心誠意 至徳を洛陽に顯はす

朋友の朗かなるに交り 自己の明を回す  
頭を聚め世を忘て雙袖を連ね 手を換へ沙を握て太刀を報す<sup>6)</sup>

右は、三河瑞雲山真福禪寺の僧栢隱が延宝四年九月に一翠子の家を訪れた後、三河に戻り一翠子に宛てた書簡の一部であり、一翠子の著書『和語円機活法』卷之三下「清書法」という項に掲載されている。引用箇所は一翠子の名はないが、これに続けて掲載される返信に、「延宝丁巳上元后二日 宮川一翠子正春拜」とある。

真福寺は現在も豊橋市牟呂に存続。住職の御教示によれば、当寺は開基より十代目までは天台宗であったが、十一代目より臨濟宗妙心寺派に改宗。栢隱は十四代目にあたり、御当主は二十九代目にあられる。また真福寺には某氏の贊を付した栢隱の頂相が伝存するという。

引用箇所は栢隱が一翠子を称した部分であるが、一翠子の伝として興味深い内容を含んでいる。それが一翠子本人とその知人との尺牘であり、なおかつ一翠子自身の著書に掲載されていることなどから、そこに記された記述の信憑性もかなり高いと言つてよからう。

この内まず注目すべきは、「初て見る正由の難第 久く慎家に住す」の句が、従来血縁にあるとは言われないながらも不明とされてきた、宮川松堅(正由)と一翠子との具体的な関係を示していると思われる点である。遺憾ながら、栢隱の言う「正由の難第」の「難第」という熟語を他に見出すことができないが、思うにこれは、「難弟」の誤刻ではないだろうか。「難弟」ならば、『世説新語』德行第一に載る、陳元方・陳季方の故事がある。

陳元方子長文有英才。與季方子孝先、各論其父功德、爭之不能決。咨於太丘。太丘曰、元方難爲兄、季方難爲弟。

『世説新語』の本文は「難爲弟」であつて、「難弟」ではないのだが、慣用的に縮めてそう言った事もあつた。例えば一翠子の『訓蒙故事要言』はこの故事を引用し、その見出しを「難兄難弟」とする。この故事はまた、松堅編の『俳集良材』（寛文二序）にも引かれている。

世説ニ云、元方難爲兄、季方難爲弟。

イフコ、ロハ陳元方陳季方兄弟ナリ兄弟トモニヨキモノナレハ  
タカイニマサリヲトリナシトナリ。

右の解説より考えれば「難弟」は、弟として兄に優劣つけがたい者の謂、つまりは弟の尊称として良いであろう。

このように語彙について若干の推測を挟まなければならぬものの、宮川一翠子は宮川松堅の弟だつたと考えて良いものと思われるのである。

### 一 翠子の漢詩文

次に、一翠子の漢詩文に関する文事について見てみよう。先に挙げた著述を見ても判るように、一翠子の文業の中心は漢詩文にあると言つて良い。著書の他に見えるものとしては、『扶桑名賢文集』に「黒谷紫雲石記」（「元禄第四辛未五月廿五日」の識語あり）が収め

られる。また、中野三敏氏蔵写本「昇仙石贊」は、伊勢の入度会延貞の持つ昇仙石に寄せた諸家の詩文を収め、その内に一翠子の「題昇仙石」という詩が載る。同書には兄松堅も名を連ねるが、松堅が寄せているのは長歌である。和歌伝授まで行なつた堂上派地下歌人松堅には、いまだ漢詩文の作を見ないが、こうした二人の文学的素養の径庭の背景には、一翠子が医業に携わつていた事が深く関わつていたものようである。これまでの研究に一翠子の医業に触れたものを見ないが、例えば、宮崎修多氏の紹介になる、不可説堂止々翁著「掛瓢軒弄閑吟雜詠」（国会蔵写本）中の「悼弔宮川氏道達一翠居士捐館」には、

城東ノ医惠達公子、臥褥不平ニシテ永泉ニ返ル。製劑研窮ス  
三折ノ術、範規涉獵ス万巻ノ編。

とあり、「城東ノ医惠」「三折ノ術」の語より、一翠子の医業に携わつていたことが知れる。また、『眠齋集和語対類』自序には、

余夙に多病、毎に辞林を事として、財利に奔らず、塵衛に偷閑にして、澹然として事無し。詩賦數百篇、倭歌幾許首有り。狂句滑稽是れ其の餘力なり。壮なる比に杏倉橋井の門に遊び、聊か濟世の志有り。業を勤る暇ま、一二友と漢和一千句を賦す。

とあり、ここには、宮川一翠子が病弱であつた事、医業に携つていた事（「杏倉橋井の門に遊び」）が、自らの筆で語られている。

医者が漢詩文を詠むこと自体、この時代においては珍しくもないが、ここでは、こうした職業の故に、一翠子の文事が松堅のそれに比して幅を持つに至ったであろう事を、一翠子の和漢文学のありかたとして着目しておきたい。

※

一翠子の漢詩人としての活動に近くあった人物と言えば、一翠子の八つの著書のうち、実に六つに序跋を寄せる長岡恭斎がまず挙げられよう。

長岡恭斎は、また圭斎、丹堂、生白、同寅、赤泉逸士、豹蔵門なども号した当時の儒医である。父は、『扶桑名賢文集』に松永昌三による「謝長岡意丹大醫生」が載る儒医長岡意丹。恭斎は漢詩をよくし、『文翰雜編』『扶桑名勝詩集』『扶桑名賢文集』などに漢詩文が載る。また、序跋を寄せるのは、先に挙げた一翠子の著書の他、『病因指南』（元禄八刊）、『難經本義診解』（宝永三刊）、『先醒齋筆記』（正徳五刊）といった岡本一抱子の医学書にも多い。

一翠子との関わりに目を向ければ、先述した序跋の他に、一翠子著の『和語巴機活法』巻二には、長岡恭斎が実際に見聞したという丈山・元賢の詩話を載せるなど、同書の編集に関わった様子が見える。また、一翠子編の漢和俳諧集『眠齋集』に載る十百韻のうち、漢句を担当するのは一翠子と「黄頭」なる人物の二人であるが、一翠子の『訓蒙故事要言』『拾遺意行集』等に寄せた恭斎の序文に、「黄頭小人」という方陽印が刻まれている事から、この「黄頭」も長岡恭斎その人であることが判る。「黄頭小人」とは、「恭」の字を、「黄

頭」、つまり黄の上部と、「小」「人」に分解したものであり、晋の時代、王恭のことを乱を好むとして百姓が誹った時に「黄頭小人」という隠語で呼んだという、『海録碎事』等に載る故事に依るものである。

一翠子と恭斎の医学における繋がりには確認し得ていないが、長岡恭斎の父意丹の和歌が松堅編『倭調五十人一首』に載り、そこには「松永貞徳門弟」との注記がある。両家は兄松堅と意丹との早くからの交誼も推測されるという事を付記しておきたい。

俳諧活動

松堅と一翠子との文学的怪誕は、一つには一翠子の医業に因むものであった。だが、彼等はその文学的始発においては軌を一にしていた形跡がある。次はその点に言及してみたい。

再び先程の栢隠尺牘に戻るが、栢隠は一翠子を「宮川正春先生」と、「正春」の号で呼んでいた。これは一翠子編『眠齋集和語対類』（天和二刊）の跋文に「天和二年壬戌冬之孟 宮川一翠子正春跋」とあったのと合致するものであり、以後の著書や漢詩などに「正春」と称するものを見ない所から、比較的早い時期に用いた名で、後年は使わなくなったものかと思われる。ここで問題は、宮川氏で正春といえは、貞門宮川松堅周辺の俳諧撰集にその名を見出す事ができる事である。宮川一翠子に俳諧活動のあった事は、いままで言及したのを見ないので、ここで少々詳しく述べておく必要がある。ただ、この期に正春という号の俳人は多く、『貞門談林俳人大観』によれば、京都住の者だけでも、山中氏・神田氏・池田氏・由良氏

などが活動していたようである。ここでは彼らの存在を踏まえつつ、宮川正春であると判明するものを左に挙げてみよう。宮川一翠子であると判断した根拠は( )内にそれぞれ示した。また、参考までに、正由(松堅)も入集している俳書には○を付した。

○万治三年(一六六〇)四月、一雪編『歌林鋸屑集』<sup>(13)</sup>刊。正由七十八句・正春五十九句入集。(作者名「宮川正春」)

○寛文元年(一六六一)九月、良保編『弁説集』刊。正由一句・正春二句入集。<sup>(14)</sup>(作者名「正春。正由入集より判断」)

○寛文二年(一六六二)七月、正由編『俳集良材』刊。正春十九句入集。(作者名「宮川正春」)

○寛文三年(一六六三)三月、成安編『埋草』刊。正由二句、正春一句入集。(作者名「京 正春」。正由入集より判断」)

○同年五月、良保編『破枕集』刊。正由四句・正春五句入集。(句引「同(宮川) 正春」)

○このころ、一貞編『貞徳誹諧記』刊。正由九句・正春一句入集。(作者名「宮川正春」)。

○寛文十年ごろ、一雪編『誹諧洗濯物』刊。正由二句・正春一句入集。(句引「宮川氏 正春」)。

○寛文十二年(一六七二)三月、松苔軒可常編『誹諧法農華』刊。正春九句、正由十五句入集。(句引「宮川氏 正春」)

○延宝六年(一六七八)正月、歳旦集『誹諧三ツ物揃』刊。政由歳旦。引付に正春句入集。

○天和二年(一六八二)十月、一翠子編『眠瘡集和語対類』刊。一翠子(漢句)・正由(和句)らの漢和千句入集。

元禄三年五月、晚山編『千代の古道』刊。一翠(漢句担当)・晚山の漢和連句を載す。<sup>(15)</sup>

元禄五年ごろ、幸佐編『入船』刊。「一翠」の序記を持つ漢文序あり。

○元禄九年(一六九六)二月、稲丸編『呉服絹』刊。正由一句入集。「丙子孟春下泮 宮川一翠子書三養軒下」の跋記を持つ漢文跋あり。

およそ以上の通りであるが、この他、言水編の『江戸蛇之詐』(延宝七刊)、『前後園』(元禄二刊)、『都曲』(元禄三刊)の三書に、京住の「一翠」の号を持つ俳人が載る。正春の俳諧活動は、既刊書よりの抜書である『詞林金玉集』(延宝七序)は除外するとしても、延宝六年の『誹諧三ツ物揃』以来、俳諧師「宮川正春」としての明らかな活動の跡は見られなくなる。そしてそれと入れ代るようにして、この京都住の「一翠」号がみられるようになるのである。宮川正春がこの頃一翠号を用いている事は『和語田機活法』所収の先の尺牘などより疑い無いのであるが、同時期「一翠」の号が池西言水の俳集に名を連ねている事には、少なからず注目させられる。貞門俳諧師「正春」から、はじめての著作である、漢和俳諧の『眠瘡集』、さらには『瀟湘八景詩歌抄』『和語田機活法』といった、漢詩関係の著作をもつ「一翠」へと脱皮してゆく微妙なこの時期に言水と交流があったとすれば面白いが、宮川一翠子正春と、言水編著に発句を載せる京住の一翠とを同一人物とするには、なお一考の余地を残す。いまだ是非を決するに十分な論拠は揃っていないが、現時点では次のように考えている。

「一翠」号が載る言水編著は、『江戸蛇之詐』（延宝七刊）、『前後園』（元禄二刊）、『都曲』（元禄三刊）の三書であるが、この三部以外の宮川一翠子の登場する諸書には、池西言水との関係は全く見ることができない。また、言水編著に見られる「一翠」句は、句引などから京都住である事までは判るものの、宮川氏であるという情報は何ら含まれていないのである。また、その言水編著に入集する連衆には、松堅編『俳集良材』など、松堅門の色濃い俳集と共通する作者の名は殆ど見る事ができない。

居住地にも問題がある。言水編『都曲』（元禄三刊）に載る一翠句と同じものが『誹諧京羽二重』（元禄四刊）にも載る。巻二の「誹諧点者並誹諧師」のうち、「三條通ヨリ二條通マデ之間」の項に、「鴨涼も憂や堤に鳴きつね 同所 一翠」とあるのがそれで、「同所」とは「両がへ町御池」のこと。これにより、この「一翠」が、元禄四年前後に両替町御池に住していたことが判明する。だが、宮川一翠子著『訓蒙故事要言』（元禄九年刊）の序文には、「荊荆氏某予を東洛に訪て」という一文が見え、先述の『掛瓢軒弄閑吟雜詠』（国会蔵写本）中の「悼甲宮川氏道達一翠居士捐館」（卷三）には、一翠子を「城東ノ医悪」と呼ぶ。両替町御池といえは現在の中京区にあたり、どうしても「東洛」「城東」とは言い難いのである。

以上の点より、言水の著作に現れ、『誹諧京羽二重』に入集する京都住の「一翠」を宮川一翠子であるとすることは躊躇せられる。同時期の京都に一翠の号を持つ俳人がいたと考えるべきであろう。

また同様に、团水編『秋津嶋』（元禄三刊）に入集する一翠、矩久編『蕪狩』（宝永元刊）に数多く入集する一翠も、宮川一翠子とは別人と考えて置くべきと思われるので、ここでは挙げなかった。

## 正由の俳壇的位置

右に挙げた通り宮川一翠子は、管見によれば百句程の発句を残しており、著書を出版する以前の寛文〜延宝期に、一流とは言えぬまでも、歴とした貞門俳人としての活動があった事が知れるのである。彼の入集する俳書の性格を帰納してみれば、ほぼ松堅の傘下と考えてよいであろう。少年時に貞徳に発句を認められて以来、貞徳の遺庵を継ぐに至った貞門の俊英松堅の弟であった一翠子としては当然のあり方と言つてよいのではないか。延宝六年の歳旦以来、目立った俳諧活動が見られなくなるのも、松堅の俳諧離れとおよそ軌を一にしたものと考えられそうである。

ただ、松堅と言えば、従来貞徳の門弟とのみ言われてきたが、それ以外の俳人との具体的な交渉はあまり顧みられていない。松堅の貞徳門に在った事はもとより疑うべくもないが、貞徳が没した承応二年の時点で、寛永九年生の松堅はまだ二十二歳、しかも貞徳生前の俳書への入集を見ない。実質的な俳諧活動における同朋は、また別に考えられる必要があると思う。

その際、松堅の唯一の刊行された俳書『俳集良材』（寛文二序）が、彼の俳人としての環境を知るのに有益である。ここに入集する人物を眺めてみれば、入集者は百五十人を越えるが、その内、この時点で既に編著を刊行しているのは、当時既に没している貞徳の他には、季吟・一雪・良保の三人のみである。貞門の有力作者の入集が比較的少ない事が判る一方で、その中に名を連ねる季吟・一雪・良保といった人物が、松堅と親しかったであろう事が予想される。こ

ここでは季吟・一雪について、その松堅との関係を見ておきたい。

まず季吟と松堅との関係を示す資料としては、『季吟日記』寛文元年十一月二日の条に「二日 けふ冬至なり平瀬利冬兼約にて振舞ハレ又相客慈仙常侍蜂屋政信林可政由新次くは正行」とある。また、季吟の『俳諧両吟集』（寛文四刊）は、寛文二年、松堅と季吟とが編んだ両吟百韻を収める。

季吟の幅広い活動から見れば些細な事例であるが、松堅の具体的な俳諧活動を示す資料は数少なく、松堅の側からは季吟がクローズアップされるのである。

次に一雪との関りに目を転じる。前述の通り、一雪編の『歌林鋸屑集』が正春句の初出であった他、一雪編『誹諧洗濯物』にも、松堅・一翠子共に入集している。そしてこうした俳書への入集の他に、『貞徳永代記』（随流著、元禄五刊）の左のような発言も、松堅と一雪との近さに触れた同時代の発言として注目すべきであろう。

一 宮川正由は貞徳の誹弟か、たしかに不知。椋梨一雪と同朋の誹士なれば、貞門えもま見へられしか。又齋斎・以悦などに哥の道をも稽古せしといへば、連哥の大事など傳受せし事もあらん。柿蘭の跡を望し旨趣、羽二重にかき出し、林鴻が釣出せし貞徳直弟の系圖にもせたり。然れば哥道・誹道に付ても、貞徳をしのぶ心ざしはあらは也。もと實誹にして、今程は哥の点をもなせりとかや。<sup>(18)</sup>

季吟・一雪のそれぞれと松堅との関係は以上のように確認ができるのであるが、一雪と季吟との関係を示す記事もある。

うそか誠か、雪は徳門へは終に足のつまさきをも入ぬとなされども、門をたゞきて五句三句づゝの俳諧は点とられしと承るよし、それにても弟子ハ弟子か、したがそなたハ貞徳ともし席にゐられた事ハなひとの、季吟といへるハわらハ名中村久助静厚と云しものなり、二八計の比よりも貞室が弟子として數十年室門をたゞき、こゝらの大事を習ひ數通の誓帯を仕られ、他の師をとらじと云しもの也、そなたハ其季吟子が弟子なる事更にかくれハおりなひぞ、(貞恕著『蠅打』寛文四刊)<sup>(19)</sup>

言うまでもなく『蠅打』は、一雪著『茶杓竹』（寛文三刊）における『正章千句』（慶安元刊）論難に対し貞恕が再反論を企てたもの。そこには、「そなたは其季吟が弟子なる事更にかくれはおりなひぞ」と、一雪と季吟の関係が暴露の口吻を以て語られている。この『蠅打』は貞恕の編であるが、正章の強力な後押しがあり、一方の一雪の方にも、季吟の影があったと言われている。<sup>(20)</sup> 季吟が室門にあった事を考えれば、この発言は、季吟と一雪との関係を考える上で、傾聴すべきものであると言えよう。

松堅は貞徳の遺庵を継いでいるものの、貞徳の跡目争いに積極的に関った様子はない。だが、右のごとき季吟と一雪との関係、また一雪と松堅との「同朋」であった事を鑑みれば、貞徳亡き後、貞室を台風の目として混乱する俳壇の中で、季吟・一雪達と比較的近い位置にあったと位置づけてよからう。

松堅は先に挙げた『誹諧京羽二重』で言われるように、元禄初頭には既に活動の中心を俳諧から和歌へと移す。松堅の和歌活動は、木瀬三之、加藤齋斎、今井似閑らと近かった事が知られているが、



俳諧活動において近かった季吟との関わりは、それらとどのような関係にあるのか。この期の俳諧と和歌とのありかたを考える上でも興味深い問題と思われるが、今はその用意が無く、別稿を期したい。ともあれ右に見てきたように、漢詩人一翠子は、その文学的始発においては、むしろ和文芸たる俳諧が主であった。後年一翠子の著作が漢詩文の知識を中心にしつつも、和文芸への造詣が深かった事の背景には、こうした、兄松堅を介した若年よりの俳諧活動の影響が大きかったのである。

また資料は乏しいが、一翠子の和歌にも触れておきたい。松堅編の『倭調五十人一首』(享保八刊)に二首載る事は夙に知られているが、その他、井上敏幸氏の紹介になる『楓園家塵』には、巻百七十六「塵袋 竹」に今井似閑の不惑を賀する和歌が集められており、その内に、宮川松堅と並んで「今井自閑兄四十賀をことふきて／宮川一翠／いく春も花のなかめにくれ竹のよそちを千よのはしめにはして」と見える。享保八年に齡六十七で没した似閑の四十歳は元禄九年。松堅にリードされつつ、一翠子も俳諧から和歌へと転じていったものであろうか。

### 『眠齋集』漢和俳諧の位置付け

こうした一翠子の和漢の文事のありかたを、その周囲の人物の中で定位するならば、彼は松堅門の俳人・歌人と、恭斎ら漢詩文仲間との接続点にあったという事ができる。当時彼らの間でしばしば行われたであろう漢和俳諧が、『眠齋集和語対類』という形で他ならぬ一翠子の手によって纏められた事の理由は、こうして納得せられる

のである。

深沢眞一氏は、『眠齋集』の漢和俳諧に俳意の弱い事、漢字訓読の手法が複雑化している事などを指摘し、季吟や立圃の漢和俳諧とは一線を画したものであるとする。そして、序文を寄せた長岡恭斎が若年江戸に行き林家と交流し、また貞享元年に林家の聯句集『山迹七字城』に跋を寄せている事に注目、『眠齋集』の漢和俳諧は、従来の貞門の漢俳諧の流れとは全く離れて立ち、長岡恭斎を通じて、林家の聯句の影響下になったものと結論づけておられる。

しかし、今まで見て来た通り、宮川一翠子には、『眠齋集』刊行以前に古くから貞門俳人としての経歴があり、当時の和文壇と無縁ではなかった。

また、長岡恭斎を通じての林家の連句の影響も一考を要する。例えば中村幸彦氏は、恭斎が元和九年に帰洛したとし、林家に儒か医を学んだかと推測しておられるが、管見では恭斎は、享保十年刊の藤井見隆著『医療羅合』の校定・序を担当しており、これと元和九年帰洛との双方を真実と採るならば、少なくとも百数十年の齡が必要になるという不自然が生じるのである。実は『恭斎備忘録』<sup>(26)</sup>にあって中村氏がその根拠とされたと思われる、

余比年在江戸、元和九年旋洛而逢除夜、因作儼辞云爾。<sup>(27)</sup>

という一文は恭斎の言ではない。これは同書巻三「逐儼式」とある章段の末尾に位置するが、この章は、羅山・文弘續の問答の後に、恭斎が『羅山文集』にある「儼文」を引用するという構成になっている。「余比年在江戸……」の句は、『羅山文集』巻五十六に徴すれば

明らかかなように、もともと羅山作「儼文」の末尾に付されたものである。つまり元和九年の帰洛は、長岡恭斎の事蹟ではなく、羅山のものだったのである。また、林家の聯句集『山迹七字城』が京都で板行されるに際し恭斎が序を寄せた事や、江戸より知人の持ち来った竹洞の詩と林学士の評を併せ論じた事も、林家との「交流」とまでは言い難いものであろう。

はたしてこうした恭斎・一翠子・松堅らの漢和俳諧が、「従来の和漢俳諧の流れとは全く離れて立」っており、他のものに比して特別に林家の聯句の影響を受けていたかは、いささか疑問である。本書での和句の担当者は松堅が最多であるが、一翠子の俳諧の牽引者である彼が俳諧師として季吟と近い位置にあった事は先に述べた。『眠齋集』の漢和俳諧史上の位置付けを、季吟のそれあたりから見ようとする視点もまた必要ではないだろうか。

### まとめ

以上、和漢の文学に通じた一翠子は、俳諧・和歌に関しては兄松堅の牽引のもとにあり、漢詩文は長岡恭斎らとの医業を通じての交遊に依る所が大きかった。

雑駁と形容される京都文壇であるが、個人のレベルにまで分け入れば各人のあり方は一様でない。一翠子のような人物は、各文芸ジャンルで閉じた研究においては重んじられないが、近世前期京都文壇を一つの総体として考える際には、ジャンル相互の交渉、位相を考える上で非常に興味深い存在といえよう。一翠子の右のような事例が、そうした問題意識の上で資する所あれば幸いである。

### 【注】

- (1) 小高敏郎「加藤誓斎の伝とその文事」(『近世初期文壇の研究』所収、昭和三十九年十一月 明治書院) 他。
- (2) 古屋彰「節用集と世話字盡——『字林拾遺』の受容をととして——」(『國語史學の爲に』所収、昭和六十一年五月)、深沢真一「眠齋集和語対類」考」(『論集近世文学』4 俳諧史の新しい地平』所収、平成四年九月)
- (3) 神谷勝広「宝永・正徳の浮世草子と中国故事——『訓蒙故事要言』などからの摂取——」(『名古屋大学国語国文学』七十一 平成五・七) 他一連の論考
- (4) 上野洋三氏「日本古典文学大辞典」第三卷「詞林意行集」の項、昭和五十九年四月 岩波書店) によれば、この種の紀行文の集成の濫觴であるという。
- (5) 原漢文。以下本稿における引用は、訓点・ルビを基本的に省略し、旧字体・句読点を私に改めた箇所がある。
- (6) 原漢文。引用は京都大学附属図書館蔵本による。
- (7) 松堅は俳諧活動に於ては、正由・政由・正行といった号を用いる事が多いが、便宜上、引用部以外での呼称は主に松堅で統一する。
- (8) 引用は新釈漢文大系七十八「世説新語」上(昭和五十年一月刊)による。
- (9) 引用は東京大学酒竹文庫マイクロフィルムによる。
- (10) 『文翰雜編』卷三十三には、『昇仙石贊』を書写したと思われる箇所があり、『題昇仙石』という一翠子の漢詩が載るが、誤写により、隣に掲載される熊谷菫斎の漢詩と同文となっている。中野氏蔵本によりこの誤りを正すことができ、これが菫斎の詩の重複であると判明する。左に中野本「昇仙石贊」に載る一翠子の詩を挙げておこう。  
題昇仙石 書盆中奇石聳青螺嘉遜壯觀豈有他不羨昇仙橋上客再乘

- 駒馬欲相過／乙亥春之孟 京宮川道達宮川一翠子道達／書于三養軒下  
宮崎修多「国風・詠物・狂詩」古文辞以前における遊戯的漢詩文の  
側面」(『語文研究』五十六、昭和五十八・十二)
- (11) 恭斎の伝については、中村幸彦「未刊隨筆談」(『中村幸彦著述集』卷  
十四所収)、渡辺憲司「辻原元甫略譜」(『江戸時代文学誌』一、昭和五  
十五・十二)等と言及があり、参考にした。また、長岡恭斎と一翠子  
とが關係深かつた事は、深沢真二「眠齋集和語対類考」に既に指摘  
があるが、本稿ではその具体例を幾分か補足する。
- (12) 句数は愛知県立大学蔵本(夏・秋・冬のみ存)に依った。  
句数は天理図書館蔵本(秋部発句のみ存)によった。
- (13) 『俳文学大辞典』(平成七年十月、角川書店)の「千代の古道」の項(雲  
英末雄氏担当)を参考にし、『京大坂評語山瀬評判』に依った。
- (14) 引用は『日本俳書大系 俳諧系諸逸話集』による。
- (15) 引用は『日本俳書大系 俳諧系諸逸話集』第二卷(昭和六十三年二月  
臨川書店)による。
- (16) 引用は『日本俳書大系』一五「俳諧系諸逸話集」(昭和二年五月、日本  
俳書大系刊行會)による。
- (17) 引用は朝倉治彦校『貞門俳論集』上(昭和三十二年八月、古典文庫)  
による。
- (18) 野村貞次「俳諧点者の脱皮」(『季吟本への道のり』所収、昭和五十八  
年三月、新典社)
- (19) 井上敏幸『國家塵』抜書(一)―連歌師時春・昌埜父子 附翻刻「時  
春聴書」―(『江戸時代文学誌』二、昭和五十六・十二)他。
- (20) 『京都名家墳墓録』(大正十一年十月、山本文華堂)による。
- (21) 前掲深沢氏論文。
- (22) 前掲中村氏論文。
- (23) 序記は「享保己巳觀瀾ノ夕 長岡恭斎毫ヲ鴨河隱栖ニ濳ク」とある。  
中村幸彦氏所蔵本による。
- (24) 原文訓点あり。句読点は私に付した。

- (28) これとは別に恭斎の年齢について示唆を与える記述が、『扶桑名賢文  
集』(元禄十一刊)所収の、長岡恭斎「謝懶斎藤復君書」と藤井懶斎  
「答長岡恭斎書」の尺牘である。この中で恭斎は、「可憐生然尋常達人  
所說者既垂半百而椿萱之在堂。想字内幾人哉」と、自ら齡五十になろ  
うとしている事を述べている。この尺牘に年記はないが、懶斎が返信  
で、自ら「嗚呼行年七十有九、從此之後安知有復與足下通書之日哉」  
と嘆じている箇所があるのが参考になる。懶斎の生没年については諸  
説あるが、船木真由「藤井懶斎の文学観」(『香椎潟』三十三号、昭和  
六十二・九)の元和四年生、宝永六年九十三歳没説に信憑性が高い  
ように思う。この説によれば、懶斎七十九歳は元禄八年であり、長岡  
恭斎はこの年に四十九歳であったという事になる。懶斎の返信が年を  
越している可能性、恭斎の「垂半百」という語が正確に四十九歳とは  
断定しかねる点などから、生年の確定には至らないが、少なくとも、  
元和九年に恭斎が江戸から帰京した、という事はありえないと言って  
よいであろう。
- (29) 前掲中村氏論文。